

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：37402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02962

研究課題名(和文) 漢字文化を基礎とした中期朝鮮語文法および語彙表の開発

研究課題名(英文) Development of Middle Korean Grammar and Vocabulary Table Based on Chinese Character Culture

研究代表者

矢野 謙一 (Yano, Kenichi)

熊本学園大学・外国語学部・教授

研究者番号：00271453

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は戦前の日本人研究者が行った研究法を復活させ、日本における漢文の書き下し文とその注釈の蓄積を生かし、現代朝鮮語を媒介とせず日本語から中期朝鮮語に直接触れることができるようにしようとする試みである。材料として『分類杜工部詩諺解』の詩を選んだ。これは他の諺解本が仏典、漢方医学、儒学の中期語訳で術語が多く、専門の知識が必要となるが、杜詩は文が短く、情景や心象の描写であり、日本で教育を受けた者にわかりやすいためである。これを土台に漢文、書き下し文、初刊本諺文を対照したテキストを作り、これに語彙の解釈し、文法の注釈を加えた本を作り、日本語から直接に中期朝鮮語を学べるようにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は戦前の日本人研究者が行った研究法を復活させ、日本における漢文の書き下し文とその注釈の蓄積を生かし、現代朝鮮語を媒介とせず日本語から中期朝鮮語に直接触れることができるようにするための試みであった。テキストは15世紀に杜甫の詩を中期朝鮮語に訳した『分類杜工部詩諺解』を選んだ。これは杜甫の詩は文が短く情景や心象を描写し、仏典などのように特殊な用語を学ばずとも、日本で教育を受けた者にわかりやすいからである。杜甫の詩の漢文、書き下し文、初刊本諺文を対照したテキストに語彙の解釈し、文法の注釈を加えた本を作り、日本語から直接に中期朝鮮語を学べるようにした。

研究成果の概要(英文)：This research revives the research methods used by Japanese researchers before WW2, and makes use of the accumulation of written Chinese text interpretations and their annotations in Japan. In this research our group chose poems from "Classification Du Fu in Middle Korean translation" This is because other books are translations of Buddhist scriptures, Chinese medicine, and Confucianism, so they use many technical terms and require specialized knowledge. Compared to these books poems of Du Fu are short.

This is because it is easy for the recipient to understand. Based on this, we made a book comparing Chinese sentences, translation in written Japanese Middle Korean translation, with lexical interpretation and grammatical annotations to make it possible to learn Middle Korean directly from Japanese.

研究分野：朝鮮語学

キーワード：中期朝鮮語 杜甫 語彙 文法形式 諺解

## 1. 研究開始当初の背景

中期朝鮮語文法の本格的な研究は前間恭作(1924)『龍歌故語箋』から始まった。当時の日本人研究の方法は、「諺解」が漢文の中期朝鮮語訳であることに注目し、まず漢文を書き下し、漢字の意味を把握し、それを「諺解」の朝鮮語文と対照し、諺文の文字遣いを見定め、中期朝鮮語そのものの研究を行った。この研究法は1945年の敗戦まで続いたが、朝鮮半島からの引き揚げと混乱の中で廃れてしまった。その後、中期朝鮮語の研究は朝鮮半島の南北の研究者によってすすめられたが、母語話者がもつ言語能力に依存し、これまでの研究とは異なった展開を遂げた。朝鮮古語辞典や中期朝鮮語の文法書が北朝鮮では<朝鮮文化語>で韓国では<標準語>で書かれたものが公刊された。これらを理解するには高度の現代朝鮮語の知識が要求され、日本語話者にとって中期朝鮮語は疎遠のものとなった。

朝鮮半島で出版された中期朝鮮語の研究成果は母語話者の語感を前提に出た成果であり、日本語話者にとって「諺解」の現代語訳、辞典の語釈、対訳は曖昧なものに見え、これらは研究の道具でありながらも障害ともなった。例えば、朝鮮古語辞典の代表的なものは『李朝語辞典』(1964)である。対訳は現代語の語感によるもので分析的な考察の結果でなく、非母語話者には使いにくい。また文法書としては韓国の大学の教材として広く使われる『標準中世国語文法論』があり改訂を重ねられたが、韓国の学校文法の範疇が使われ、非母語話者にとっては分かりやすいものではない。北朝鮮でも同様で辞典としては『朝鮮語大辞典2巻』『付録2古語』(1992)や『中世朝鮮語辞典』(1993)、文法としては『朝鮮語学全書』(2005)のなかに歴史文法や語史があるが、われわれと観点が異なり単語では多義語の場合、例文を見ても意味があいまいな記述がある。また文法も記述が独特で、まず北朝鮮の文法記述についての理解が必要となる。

このような状況から抜け出すためには、戦前の日本人研究者の方法が解決のカギとなると考え、漢文の書き下し文を手掛かりに「諺解」の朝鮮語を解釈し、現代語を媒介とすることなく中期朝鮮語が解釈できるようにすることをめざした。

## 2. 研究の目的

本研究は戦前の日本人研究者が行った研究法を復活させ日本における漢文の書き下し文とその注釈の蓄積を生かし、現代朝鮮語を媒介とせず日本語から中期朝鮮語に直接触れることができるような文法と語彙表を作ろうとするものであった。対象は1443年以降の訓民正音で書かれた資料のうち漢文が原本でそれを翻訳し「諺解」とした文章とする。時代は15世紀にかぎることとした。

まず、志部昭平(1990)『諺解三綱行實圖研究』の校注にある文法解説を共同研究者の共通の基盤として、1920年代から1945年の引き揚げまでの日本人研究者が蓄積した研究方法と成果を現代でも利用できるようにする。この目的は、漢文を介した「諺解」の解釈は戦後わざわざ行われただけで学ぶに足るものが書籍にしか残らず、実際に追体験して体得することである。この成果は発表を目指すものでなく、今後の研究にそれぞれが生かすことになる。

研究の主要な目的の一つは、語彙表の開発である。語彙表は収録語を固有語のみとし漢語由来の漢字語は収録しない。また当時の文章語である吏読も収録しない。漢語の知識のある使用者が中期朝鮮語の文献の解読に必要な単語を収録する

研究の主要なもう一つの目的は、現代朝鮮語の知識を前提とせず、学習者用の中期朝鮮語文法を編むことである。その内容は、表記法の変遷、文字の説明、品詞論、語形成、体言の曲用、用言の活用、統語論を説明とした。この2つを道具に日本語から中期朝鮮語に直接触れることができると思った。語彙表も文法も電子ファイル化し公開することを目的とした。

## 3. 研究の方法

まず、『龍飛御天歌』『釈譜詳節第十九』の中期朝鮮語-漢文(漢字)-日本語の注釈をおこない、語彙表の作成をすることにする。語彙表の各項目は、見出し語、品詞、品詞の下位分類、不規則用言の場合はその活用形、見出し語の対応する漢字、訳語、現代語、例文とその和訳、例文の出典とした。見出し語は当然、形態素を取り出しその代表形を書くことになる。当時の表記法は音声表記が原則で、形態素を取り出す作業から始める。品詞と品詞の下位分類は使用例が少なく分類不可能な語は無理に分類しない。一つの単語が違う漢字に対応するときはできるだけ多く採用するが、3つを超えるときは常用漢字を優先する。訳語は語感がつかめるように選択する。例文は用法がわかる範囲にする。これは当時の文が1段落にわたる長い文が多いからである。これらをまとめ、まずは手書きで原稿を作成し、次に手書き原稿の電子化を試みる。

ここで研究遂行上の大きな課題が出てきた。中期朝鮮語で使う古い諺文、発音記号、旧字体、常用漢字体、現行ハングルを同じ画面に入力するのに、いろいろなワープロソフトが存在するにもかかわらず、それぞれの入力ソフトは使用するどれかの文字に対応しないという予期しない困難が発生した。印刷会社に相談をしたが費用と時間がかかりすぎることがわかり、研究代表者が解決すべき研究課題となり2018年度後半から2019年8月までこの問題の解決に時間を費し、8月下旬に解決を見た。さらに理論的に推定した見出し語(形態素)の入力は文献ではそのままの形で使用されないため古い諺文で入力ができず、依然として解決すべき課題として残された。この問題が全面的に解決したのは、2019年9月である。語彙表では見出し語の配列が課題となる。最初は標準語の配列を試し、その欠点を直し、欠陥が見つければ、それぞれ配列法の長短を検討して、見出し語の配列を決める。

文法は現代朝鮮語の知識を前提としない学習者用の中期朝鮮語文法は編むことである。その内容は、表記法の変遷、文字の説明、品詞論、語形成、体言の曲用、用言の活用、統語論である。

説明は文法形態の説明と文法記述に必要な例文の「諺解」の文、対応する漢文、読み下し文とし、記述は構造主義言語学の手法を用いる。文法用語は橋本文法の用語を基本とし、相当する用語が見つからないものについては言語学の入門書で一般的に使われているものから採用する。例文は韓国で電子化されたものがあれば利用する。その際、検索をかけて見つけた例文は必ず影印本で確認し、丁の番号と裏表を明らかにする。ところが影印本で、印刷がよくないものでは確認ができない箇所があり。さらに電子化されたものは原典を反映したものが入力ミスかを確認するため原典との照合が必要なものを含んでいた。コロナ流行で韓国及び国内の大学図書館のっ利用に制限がかかり、原典との対照が必要な例文はすべて排除することにした。

この研究は共同研究であり、大体の原稿を代表者が用意し、それを分担者が読み、誤りなどを研究会で議論し修正を加える。この研究は漢文の書き下し文を手掛かりに「諺解」の朝鮮語を解釈し、現代語を媒介とすることなく中期朝鮮語が解釈できるようにすることをめざすものである以上、実際に大学教育で試用してみてより適切なものに改善することにする。

#### 4. 研究成果

語彙表は3回にわたり試作本をつくり共同研究者や中期朝鮮語を読める研究者に配り意見を聞き改訂した。1回目は『龍飛御天歌』と『釈譜詳節第十九』から見出し語を取り、研究方針で定めた項目を書き、400字詰め原稿用紙に手書きし、コピーを製本し配った。その結果、日本語での解説は、朝鮮語を媒介とした辞典よりはるかにわかりやすい、対応する漢字ののせてあるため漢文との照合がしやすい等の評価を得た。一方、見出し語の配列規則があいまいで見出し語を思ったようには探し当てられないという指摘があった。2回目は『法華経諺解』からも見出し語を加え、配列を創製当初の訓民正音(解例本)による歴史的原則に基づいたものにし、電子ファイル化したものである。この配列法も問題を残した。主な問題点は現在使われていない子音連続、母音字と子音字の位置、理論的に抽出された形態素の表記にあることがわかった。3回目は『杜詩諺解』からも見出し語を加え、配列原則は歴史的原則を尊重しつつ独自の原則を加えたものにした。

その原則は、子音字と母音字を同等に扱い、子音字列の後ろに母音字列をならべ、子音字列内の各子音字の配置は同じ調音位置にあるものは創製当初つかわれた加画の原理に従うというものである。これにより従来とは異なる配列になるものの順序がわかりやすくなり、理論形も合理的に配列できるようになった。この配列原則は新しい知見である。

古語の入力法の改革は研究成果を出すのに必要な課題となった。現行の入力法は韓国語綴字法の原則に基づき、使用する文字数、音節の可能な組み合わせなどを反映したもので、直接に文字を入力し、綴字法に従った組み合わせができるようになっている。古語を入力できるものも音節内の文字の組み合わせに制限があり理想形は入力できない。そこで表音文字を直接入力せず漢字のごとく文字を登録してそれを必要に応じて取り出す方式を採用し、まず漢字変換に優れ、常用漢字とそれ以外の漢字を入力できるソフトを利用し、それに現行のハングルを入力できるようにして、古い諺文字を登録すれば引き出せるようにした。この方法だと10万字以上あるハングル文字の組み合わせをすべて入力できるが、実際に使われる古語の音節で現行のハングルで入力できないものは理論形を含め300字ほどで十分実用に耐えることがわかった。学会発表などで活用したところ反響があり、求めに応じて、市販されていない、新しく作り上げた部分については無償で提供している。これはこの研究で当初予期しなかった成果である。

『分類杜工部詩諺解(1巻~10巻) 漢和諺対象』を作成し、研究分担者に配った。これは『分類杜工部詩諺解』の1巻から10巻までの詩を漢文、書き下し文、初刊本諺文、重刊本諺文)を対照させたものである。諺文は文節ごとの分かち書きとした。まず杜甫の詩の原文と書き下し文を読み、中期朝鮮語をみて文法形態を分析できるようにしたものである。これは次のような知見を含む。中期朝鮮語で残された文献は仏典、漢医学、儒教書などが主であるが、いずれも諺解に仏教用語、釈迦を取り巻く人々の固有名詞、病状や薬の名、独特の儒教用語を含み、それを解釈するには文法と単語以外にそれぞれの術語が必要となる。『杜詩諺解』の詩は文が短く、内容は情景、感傷であり時代背景が高校で教えられており、文の内容が日本で教育を受けたものにはとつきやすいことが分かった。加えて、杜甫の詩の書き下し文、解説は日本での蓄積があり、対照すべき書き下し文に適切なものが選べた。漢字文化を土台にした中期朝鮮語の教育には最適であると判断した。これは朝鮮語を母語とする者では日本語の書き下し文を媒介とするため困難な研究であるが、日本で教育を受けたものには最適である。令和2年度にこれを教材に中期朝鮮語を教えたところ、橋本文法を知っていれば、文法形態を示すと書き下し文を手掛かりに、その働きを推測でき、体系的に文法そのものを教えるより、体系的な文法に基づいた一貫した説明を文法形態に加える方が効果的な教育ができると分かった。この知見をもとに『杜詩諺解の中期朝鮮語 - 語彙と文法 -』を作成した。

『杜詩諺解の中期朝鮮語 - 語彙と文法 -』は杜甫の詩を30首選んで、それぞれの詩に、原文の漢詩、書き下し文、初刊本の諺文と重刊本の諺文をのせ、それに単語の解説、文法の解説を載せたものである。これを令和4年度の講義で教材として使用したところ、ハングルの知識(文字の読み方)のみを知っていれば中期朝鮮語が読めるようになることが分かった。

本来研究の柱とした文法は令和2年度に教材を作り試してみたが、例文を理解するためにはまず文章に接する必要がある、非効率であった。前間恭作や志部昭平といった方々が中期語の文法を本文の注釈という形式で展開した理由もわかった。

今後、語彙表はインターネット上で公開し、『杜詩諺解の中期朝鮮語 - 語彙と文法 -』は大学

の紀要に掲載する予定である。『分類杜工部詩諺解（1巻～10巻） 漢和諺対象』は研究分担者より指摘のあった書き下し文の漢字表記を整えた後、インターネット上に公開する。これまで発表が遅れたのは、中期朝鮮語の入力を外注すると他の言語より費用が多くかかり、編集の予算を超えるせいである。今回の研究成果の一つである入力法は自前で原稿を電子化でき、費用の負担をかけなくて済むので、今年度から発表してゆく。

最後に、この研究はコロナの世界的流行以前に研究計画を立て、パンデミックのなかでも研究を遂行してきたものであるが、コロナの流行を阻むためにさまざまな行動の制限がかかり、研究は計画通りには進めることができなかった。その中で研究という営みは、人々の健康が前提で、健康な人々が社会を通じて社会のために働き、その人々の協力のもと遂行できるものであること、自由な移動など今まで当然と思っていたことは社会を構成する人々のおかげであることをはっきりと認識でき、同時代を生きる働く人々の有難みがよく分かった。これは研究代表者、研究分担者にとっては新しい知見である、また、大切な認識なので記しておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岸田 文隆  (Kishida Fumitaka)  (30251870)	大阪大学・大学院人文学研究科(外国学専攻、日本学専攻)・教授   (14401)	
研究分担者	植田 晃次  (Ueda Koji)  (90291450)	大阪大学・大学院人文学研究科(言語文化学専攻)・教授   (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関